

三木清『人生論ノート』における人称詞

相 原 林 司

序

ここに「人称詞」というのは、「私」「君」「彼」のような、いわゆる人称代名詞と、その他に「ひと」「自分」「人間」のように単数または複数の人間の呼称として使われる名詞とを含む称である。日本語におけるこれら人称詞の多義性については、国語辞典の解説などにも見られるが、例えば「彼」「彼女」のように比較的近年に日本語の語彙に採り入れられた語にしても、これを単純に *he* や *she* の訳語とか同義語として捉えることはできない。その辺の消息を例えば、柳父章は次のように言う。

（一九七八年、『文学界』新人賞を受賞した小説「葬儀の日」を引用して）

ここには、「私」と、「彼女」と、「女性」とが混在するのだが、「女性」は「彼女」ではないのである。つまり、「彼女」とは三人称代名詞ではないのである。文中、「あの女性」、「問題の女性」、「女性」と、「女性」という名詞はくり返されるが、この人が「彼女」という代名詞で受けられることはない。この前後の文中を通じてそうである。「彼女」ということは、「私」の片割れである笑い屋の女に独占されている。「彼女」はここでは代名詞でない。名詞の「代」わりの役をすることではない。名詞である。

——（中略）——

今から七十余年前、明治四十年、田山花袋は、『蒲団』の中で、この「彼女」と同じような用法の「彼」を用いている。主人公が、小説の始めから「彼」と呼ばれているのである。

— (中略) —

その意味内容、人物の正体はまだ明確に知られていなくても、とにかくそこに存在しているある人物を指しており、それは一面で三人称の人物として客観化され、他面では作者の内面を託するような一人称の性格をもっている。このような「彼」又は「彼女」に託して、いわゆる日本の近代的自我が描かれた、ということである。(『日本語をどう書くか』一九八一年)

この柳父の指摘は、「彼」「彼女」という人称詞の持つ意味の多面性と複雑さを思わせて興味深い。「彼」や「彼女」がそのように特定性と不特定性を併せ持つのは、これらの語の祖形である「彼」の性格を反映しているとも考えられよう。すなわち、「彼」は代名詞として一方では遠称に用いられ、話し手ないし聞き手から離れた対象を指し示すと共に、他方では「かはたれどき」に見られるように、対象を漠然と捉えて言う用法も持つのである。さらに副詞としての用法においても「か」は、「あり得る事態を観念的、限定的にとらえてそれを指示する」用法(『日本国語大辞典』解説)とを併せ持つ。

三木清の『人生論ノート』はその名のとおりの人間探求の書である。そのような性格を反映してか、その文中には実に数多くの人称詞がさまざまな意味を帯びて使用されている。それらの多様な意味や用法を解明することは、この作品の思想内容を把握する上に有用であろうし、また日本語の表現の考察という点からも興味深いことであろう。

哲学という学問はすぐれて抽象的な学問である。そこでは、ことばは思考の手段や方法として用いられるだけでなく、しばしば思考の対象そのものにもなる。文学などの用語では、それによって指示される対象は、多くの場合具体的な存在や現象であるが、哲学では概念がことばの形をとって思考の対象となる。はじめにことばありき、どころではなく、初めから終りまでことばしかない世界なのである。従って、哲学の分野では、一つ一つの

ことが殊更に厳密に定義され規定されて使われ、また享受されねばならないであろう。そういう点では、法律の用語などにも似た性格を持つといえるかもしれない。それでは『人生論ノート』では、人称を表すことがそれぞれどのような意味内容を担い、どのように使い分けられているか。以下、人称詞ごとに使用の実例に即して考察することとする。テキストには、一九五四年発行の新潮文庫版を用い、引用に当っては、漢字だけ当用漢字の字体に改めた。

一 私

a 筆者そのものを指す指示語としての「私」

この作品、つまり『人生論ノート』の筆者としての三木清が「私」という呼称をもって文中に登場するもの。具体的には次のような形で使われたものを指す。

1 私、いふ構想力の論理は混合の弁証法として特徴付けられねばならぬであらう。(「人間の条件について」)
傍線・傍点は引用者。以下同じ

2 旅は人を感傷的にするといふ。彼は動くことによつて感傷的になるのであらうか。もしさうであるとすれば私の最初の定義は間違つてゐることになる。(「感傷について」)

3 あの遠さの感情も、あの近さの感情も、あの運動の感情も、私はそれらが客観的な遠さや近さや運動に関係するものでないことを述べてきた。(「旅について」)

これらの「私」がこの類のものである。「言う」「述べる」「定義する」のような叙述を伴つて、これらの「私」が本文の記述者であることが示されている。

b 思考・感性の主体としての「私」

「私」の指すものが筆者の三木清であることが文脈から想定されるが、前項の用法よりも、題材化、客体化されて、筆者の直接介入という色彩の薄い「私」である。

4 怒る人を見ると、私はなんだか古風な人間に会つたやうに感じる。(「怒について」)

5 もし私に人間の性の善であることを疑はせるものがあるとしたら、それは人間の心における嫉妬の存在である。〔嫉妬について〕

6 ところで今私が机に向つて仕事をしようとする場合、私は何か整はないもの、落着かないものを感じ、一時間もたないうちに、せつかくきちんと整頓されてゐるものをひつくり返し、元のやうに乱雑にしてしまふであらう。〔秩序について〕

これらに見られる「私」は、「感じる」「疑ふ」「思ふ」「考へる」など、内面・心情の表現にかかわる動詞と結び付いている。その点から考えて、これらの「私」が作品の筆者と重なることは明らかであるが、しかし前項の場合のように筆者として直接文面に介入しているわけではない。いわば筆者自身がその体験を客観化して述べることで、作品の中に素材化されていると見ることができよう。

c 想定された「個」としての「私」

前二項と違って「私」が具体的存在としての筆者自身から離れ、抽象化された仮定の存在として設定されるもの。次のような用法がそれである。

7 ひとびとは唯ひとり死ぬる故に孤独であるのではなく、死が一般的なものである故にひとびとは死に会つて孤独であるのである。私が生き残り、汝が唯ひとり死んでゆくとしても、もし汝の死が一般的ものでないならば、私は汝の死において孤独を感じないであらう。〔幸福について〕

8 私は自己が世界の要素と同じ要素に分解されてしまふのを見る。しかしながらそれにも拘らず私が世界と異なる或ものとして存在することは確かである。人間と人間の条件とはどこまでも異つてゐる。〔人間の条件について〕

9 愛は私にあるのでも相手にあるのでもなく、いはばその間にある。間にあるといふのは二人のいづれよりもまたその関係よりも根源的なものであるといふことである。〔希望について〕

10 自分が彼女に会つたのは運命であつた。自分がこの土地に來たのは運命であつた。自分が今の地位にあるのは運命であつた。個々の出来事が私にとつて運命であるのは、私の存在が全体として本来運命であるためであ

る。(希望について)

例文7は、「ひとびと」つまり人間の死について述べたものの一節であって、その「ひとびと」の中の個として「私」や「汝」が設定されていることは文脈上からも明らかであろう。それゆえ、この「私」は特定の人間の像と重なるものではない。今仮りにこの「私」を「汝」に、「汝」を「私」に入れ替えても、この例文が表現しようとする内容にはほとんど変化を生じないであろう。

例文の8は、「人間」と「人間の条件」との相異について述べた論。「私」を含む文脈はその一つの例証を挙げ論じているものであるから、ここの「私」も実在の具体像と結び付くものでなく、一つの仮象として設定されたものと考えられる。

例文の9の「私」などもまた、「彼」あるいは「汝」に置き換えても内容の伝達にさまで支障はあるまい。また、例文の10の「私」が先行する「自分」を受けて用いられていることは明らかであるが、その「自分」の体験として述べられていることが仮定の事象であることは、文脈上から読みとれる。従って、これが特定の「私」の特定の体験を述べたものでないことも明らかであり、この「私」もまた、記述の都合上設定された想定上の個であると考えられる。

d 現代人を象徴する存在としての「私」

実在の個でなく想定された「個」を指すという点では前項の「私」に近いが、前項のそれが人間一般の象徴として設定された、仮象性の強いものであるのに対し、ここに挙げるのは、現代人の特性を備えた存在としての「私」で、前項に比べてやや具象性に富むものである。

11 以前の人間は限定された世界のうちに生活してゐた。その住む地域は端から端まで見通しのできるものであった。その用ゐる道具は何処の何某が作ったものであり、その技術はどれほどのものであるかが分かつてゐた。また彼が得る報道や知識にしても、何処の何某から出たものであり、その人がどれほど信用のできる男であるかが知られてゐた。このやうに彼の生活条件、彼の環境が限定されたものであつたところから、従つて形の見えるものであつたところから、人間自身も、その精神においても、その表情においても、その風貌においても、

はつきりした形のあるものであつた。つまり以前の人間には性格があつた。

しかるに今日の人間の条件は異つてゐる。現代人は無限定な世界に住んでゐる。私は私の使つてゐる道具が何処の何某の作つたものであるかを知らないし、私が抛り所にしてゐる報道や知識も何処の何某から出たものであるかを知らない。(「人間の条件について」)

この例文では、文中の「彼」が「以前の人間」の象徴として設定された個であり、その「彼」と対比されている「私」が「現代人」を象徴するものとして設定された個であることは明らかであらう。ただし、この項に当てはまると思われる「私」の用例は、この一例のみである。

以上、作品中に用いられた「私」についてこれを四つの類型に分けてみた。使用頻度の上から見ると、bの「思考・感性の主体としての『私』」に該当するものが最も多く、cの「想定された『個』としての『私』」の用例がこれに次ぐ。aの「私」に見られるように、三木清自身が筆者として叙述に介入する度合いは、本書の場合、一般の哲学書よりも少いように思われる。

二 我々（私達）

次に複数の自称詞である「我々」もしくは「私達」は、この作品でどのように用いられているだろうか。「私」に比べてやや分類にくい点もあるが、ほぼ次のように四種類の使いさまが認められるようである。

a 人間一般を代表する人称詞としての「我々」

12 我々の誰が偽善的でないであらうか。虚栄は人間の存在の一般的性質である。偽善者が恐いのは、彼が偽善的であるためであるといふよりも、彼が意識的な人間であるためである。(「偽善について」)

13 しかもかくの如き人生において人間は夢みることをやめないであらう。我々は我々の想像に従つて人生を生きてゐる。人は誰でも多かれ少なかれユートピアンである。(「旅について」)

右のような使いさまの「我々」がこの項に該当すると思われる人称詞である。これらの「我々」が人間一般の代称として用いられていることは、「人間」を含む文脈からも明らかであらう。次の例などは前後の文脈に「人

間」ということばはないが、「人生」との関連などを考えると、やはりこの種の用法に含まれる「我々」であると思われる。

14 我々は何処から来たのであるか、そして何処へ行くのであるか。これがつねに人生の根本的な謎である。

(「旅について」)

b 現代人一般を指す人称詞としての「我々」

前項の「我々」よりもその指示する範囲がやや狭く、ほぼ近代ないし現代の社会生活者を念頭に置いて用いられたと思われるもの。次のような「我々」がこれに当る。

15 現代物理学はエレクトロンの説以来物質といふものから物体性を奪ひ去つた。この説は全物質界を完全に実体性のないものにするやうに見える。我々は「実体」の概念を避けて、それを「作用」の概念で置き換へなければならぬといはれてゐる。(「秩序について」)

16 エウマイオスは自分で革を裁断して履物を作つたといはれ、オデュッセウスは非常に器用な大工で指物師であつたやうに記されてゐる。我々にとつてこれは羨望に値することではないであらうか。(「秩序について」)

17 古代人や中世の人間のモラルのうちには、我々の意味における成功といふものは何処にも存しないやうに思ふ。彼等のモラルの中心は幸福であつたのに反して、現代人のそれは成功であるといつてよいであらう。(「成功について」)

これら、話題を現代に限り、あるいは古代人と現代人とを対比した考察において用いられた「我々」が現代人一般の称であることは文脈上も明らかであらう。さらにまた、

18 噂はつねに我々の遠くにある。我々はその存在をさへ知らないことが多い。この遠いものが我々にかくも密接に関係してくるのである。(「噂について」)

19 一般に我々の生活を支配してゐるのは、give and take の原則である。それ故に純粋な利己主義といふものは全く存在しないか或ひは極めて稀である。(「利己主義について」)

などという場合の「我々」も、先の例ほどには明確な徴表はないが、ほぼ近代人の特性を述べた記述の中に用

いられており、従って近代人一般を指した用法と見てよいように思われる。

c 筆者を含んで広く思考・感性・行為の主体を示す「我々」

これはいわば、「私」の中のb項に該当するものの複数形だといつてよい。前項の「我々」よりさらにその指示する範囲が狭まり、その分だけ記述上の主体性を増すといえようか。

20 人生においては何事も偶然である。しかしまた人生においては何事も必然である。このやうな人生を我々は運命と称してゐる。(希望について)

21 伝統主義はまさにこの二者択一(引用者注「過去は真理であるか、無であるか」を指す)に対する我々の決意を要求してゐるのである。(死について)

これらの場合は、「人生を運命と称する」「決意する」主体として「我々」の存在が規定されていると見られる。従つてこれらは、ただ漠然と現代人一般を指している前項のそれに比べて積極性、行動性に富むものであり、別項に分類する意義のあるものと考ええる。

d 日本人一般を指す称としての「我々」

人間一般、現代人一般というよりももうすこし限定を強めて、日本人を指して用いられた「我々」もこの作品中では次のように見出される。

22 日本人は特別に感傷的であるといふことが正しいとすれば、それは我々の久しい間の生活様式に関係があると考えられないであらうか。(感傷について)

23 我々の感傷的な心は仏教の無常観に影響されてゐるところが少なくないであらう。それだけに両者(引用者注「宗教的な心と感傷的な心」を指す)を厳格に区別することが肝要である。(感傷について)

これらの「我々」が日本人を指していることは文脈上からも明らかであらう。ただし、このような用法の「我々」は、私見の範囲では「感傷について」の章に見られるだけで、その例は多くない。他にも例えば、「旅について」の章など、かなり日本的な感傷性のうかがわれる章であり、従つてその中に数多く用いられている「我々」にも日本人の影がかなり色濃く投影されているように思うが、それと断定するには至らない。

三 彼・彼女

この作品中で「彼」「彼女」と三人称で呼ばれている存在は、ほぼ次の三種類に分かれる。その一は、文脈指示の代名詞としての「彼」「彼女」であり、その二は、想定された個としての「彼」「彼女」、第三には「私」と対比される存在としての「彼」である。

a 文脈指示の代名詞としての「彼」「彼女」

24 ひととは軽蔑されたと感じたとき最もよく怒る。だから自信のある者はあまり怒らない。彼の名譽心は彼の怒りが短気であることを防ぐであらう。(怒について)

25 幸福が存在に関はるのに反して、成功は過程に関はつてゐる。だから、他人からは彼の成功と見られることに対して、自分では自分に関はりのないことであるかのやうに無関心である人間がある。(成功について)

26 その時ソクラテスはまさに瞑想したのであつて、思索したのではない。彼が思索したのは却つて彼が市場に現はれて誰でも捉へて談論した時である。(瞑想について)

27 毎日遠方から汽車で事務所へ通勤してゐる者であつても、彼はこの種の遠さを感じないであらう。ところがたとひそれよりも短い距離であつても、一日彼が旅に出るとなると、彼はその遠さを味ふのである。(旅について)

これらの用例中の「彼」は、それぞれ、それに先行する「自信のある者」「ソクラテス」、あるいはそれに後続する「人間」などの語(傍点の語)を指示していることは明らかである。これらの指示対象となるものには、「ソクラテス」のように具体的な場合もあり、あるいは、「人間」(例文25)のように概念的抽象的な場合もあるが、いずれにしても文脈上先行(時に後続)する人物表示を受けて用いられている、という点では共通する。

b 想定された個としての「彼」「彼女」

28 幸福は人格である。ひとが外套を脱ぎすてるやうにいつでも気楽にはかの幸福は脱ぎすてることのできる者が最も幸福な人である。しかし真の幸福は、彼はこれを捨て去らないし、捨て去ることもできない。彼の幸福

は彼の生命と同じやうに彼自身と一つのものである。(「幸福について」)

29 自分が彼女に会つたのは運命であつた。自分がこの土地に來たのは運命であつた。自分が今の地位にあるのは運命であつた。個々の出来事が私にとつて運命であるのは、私の存在が全体として本来運命であるためである。(「希望について」)

30 もし彼或ひは彼女がもはや全く愛してゐないとすれば、彼或ひは彼女がもはや失恋の状態にあるのではなく既に他の状態に移つてゐるのである。(「希望について」)

31 しかしながら愛せんと欲する者にはつねに愛し得ざる嘆きがあり、生まんとする者は絶えず生みの悩みを経験しなければならぬ。彼は彼が純粹な生活に入らうとすればするほど、利己的な工夫や感傷的な戯れやこざかしい技巧がいよいよ多くの誘惑と強要をもつて彼を妨げるのを痛感しなければならぬ。(「個性について」)

これらの「彼」「彼女」は、特定の人物を具体的に指示してゐないのはもとより、その前後の文脈中に用いられた「人」「人間」などの人称詞を受けているとも思われぬ。「彼」「彼女」である。例文28の「彼」はこれに先行する「気楽にはかの幸福は脱ぎすてることのできる者」を指示してゐるのであろうか。そうではあるまい。この「彼」に該当する「者」を求めるならそれは「真の幸福を有する者」でもあろう。しかし、それに当たる語句は前後の文脈中には求められない。従つて、この「彼」は仮りに想定された個としての「彼」と考えなければならぬ。31の例文についても、後段に現れる「彼」は、前段の「愛せんと欲する者」や「生まんとする者」を受けて用いられた「彼」ではない。この「彼」に該当するのが「純粹な生活に入らうとする者」を指すのは文脈から明らかである。言い換えればことは、「ある人(＝彼)が純粹な生活に入らうとすれば……」と言ふのには等しい。例文の29や30では、その中の「彼」や「彼女」によつて受けられてゐると思われるような先行辭が見当らないことによつて、これらの「彼」「彼女」が筆者によつて想定された個であることが知られる。例えば例文30の「彼」や「彼女」は「私」に置き換えてもその表現価値に大きな差はないであらう。

c 「私」と対比される存在としての「彼」

広い意味では前項の、想定された個、の中に含まれるが、ただ、それが使用された文脈の中に、それと対立す

る存在、対蹠的な人間としての「私」が想定されているので、「私」に置き換えることのできない「彼」である。32 一つの情念を支配し得るのは理性ではなくて他の情念であるといはれるやうな、その情念の力はどこにあるのであるか。それは単に情念のうちにあるのでなく、むしろ情念が習慣となつてあるところにある。私が恐れるのは彼の憎みではなくて、私に對する彼の憎みが習慣になつてあるといふことである。習慣が形作られるでなければ情念も力がない。(習慣について)

この類の「彼」はその用例が多くない。私の気付いた範囲ではこの一例ぐらいである。

四 彼等

この作品の中に用いられた「彼等」の中には、次の33の例文に見るやうな、設定された行動主体を示す「彼等」もあるが、その例は少く、多くは、文脈指示の代名詞として用いられている「彼等」である。34以下の例文がそれを示す。

33 愛するもののために死んだ故に彼等は幸福であつたのではなく、反対に、彼等は幸福であつた故に愛するもののために死ぬる力を有したのである。(幸福について)

34 孤独を味ふために、西洋人なら街に出るであらう。ところが東洋人は自然の中に入つた。彼等には自然が社会の如きものであつたのである。(孤独について)

35 生理的親和性は心理的親和性に劣らず微妙で、大切である。多くの人間はそれに気付かない。しかし本能が彼等のために選択を行つてゐるのである。(健康について)

36 大衆文学の作家は過去の人物を取扱ふのがつねであるのも、これに関係するであらう。彼等と純文学の作家との差異は、彼等が現代の人間を同じやうに巧く描くことができない点にある。(感傷について)

これらの文中の「彼等」が傍点を施した語句を受ける指示代名詞として機能果しているのは明らかであらう。中には、34・36の文中の用例のようにならり限定された対象を指示するものもあり、35の例文に見るやうに人間一般を指す無限定のものもあるが、両者の差は極立った差とは思われない。

五 汝

この作品中に一箇所「汝」という人称詞の使用例が見られる。「汝」という以上、叙述の対称となる人物を呼ぶ称、すなわち二人称の代名詞としてのそれが考えられるが、この用例の場合はむしろ、想定された個としての「汝」と考えるのが適當である。

37 ひとびとは唯ひとり死ぬる故に孤独であるのではなく、死が一般的なものである故にひとびとは死に会つて孤独であるのである。私が生き残り、汝が唯ひとり死んでゆくとしても、もし汝の死が一般的なものでないならば、私は汝の死において孤独を感じないであらう。(幸福について)

右の例文中の「汝」は「私」と対比されているが、この両者とも特定の指示対象を有するものではなく、叙述の都合上想定された個としての「私」であり「汝」であると考えられる。従つて、この両者は仮に相互に入れ替えたとしても、叙述内容の伝達にはほとんど支障がないであらう。

六 自己・自分

この作品には、「自己」「自分」という人称詞がかなり多く用いられている。「自己」「自分」の一般的な意味は、話し手の自称として使われるほか、話し手、聞き手、また話題中の人物を客体化して指示する称として使われるのがそれである。ただし、この作品の中の「自己」「自分」には、話し手、すなわち筆者を直接に指し示す用法は見られないようで、多かれ少なかれ客体化された対象を指すと思われる。そしてその指示のしかたには、「文脈中のある語句によつて表現された対象を指示する場合」と、「文脈に拘らず、想定された個を指して用いられる場合」とがあり、また、思考や感覚との関連では、「思考・感覚の主体となるものを示す『自己』『自分』と」「その客体となるものを示す『自己』『自分』と」がある。もとより前二者と後二者とは、その分類基準を異にしており、従つてこれらが相互に重複する場合も多い。

a 文脈指示の代名詞としての「自己・自分」

これは次の例文に見られるような用法のものである。

38 幸福が存在に關はるのに反して、成功は過程に關はつてゐる。だから、他人からは彼の成功と見られることに對して、自分では自分に關はりのないことであるかのやうに無關心である人間がある。(「成功について」)

39 仮説は自己自身から論理を作り出す力をさへもつてゐる。(「仮説について」)

40 偽悪家はとかく自分で想像してゐるやうに深い人間ではない。その彼の想像がまた一つのセンチメンタリズムに屬してゐる。(「偽善について」)

例文38の場合は、「自分」は文中の「人間」と同じ事象を指しているのである。それはまた「彼」とも呼ばれている。39の場合、この「自己自身」は「仮説自身」と置き換えることが可能なはずである。40の場合の「自分」が「偽悪家」を受けて用いられ、「彼」とも呼ばれていること、38のそれと同様である。

b 想定された個を指すものとしての「自己・自分」

41 あらゆる徳が本来自己におけるものであるやうに、あらゆる惡徳もまた本来自己におけるものである。(「偽善について」)

42 たとへば、自分の専門は娛樂ではなく、娛樂といふのは自分の専門以外のものである。画は画家にとつては娛樂でなく、会社員にとつては娛樂である。(「娛樂について」)

43 伝統の意味が自分自身で自分自身の中から生成するものうちに求められる限り、それは相對的なものに過ぎない。(「死について」)

これらの例文に用いられた「自己」や「自分」はどのような事象を指すのであろうか。41の「自己」は、一見、文中の「徳」や「惡徳」を指すかのようにも読めるが、そうではない。これは、あらゆる「徳」や「惡徳」はそれを所有する人自体に本來關わるもので、他人の影響や關わりから生じるものではない、というきびしい思考を表明したものであろう。従つて、この「自己」は「私」とも「汝」とも、あるいは「彼」とも置き換えることができるやうな「自己」である。

43の例文の場合は、これに續けて「絶對的な傳統主義は、生けるものの生長の論理でなくて死せるものの生命

の論理を基礎とするのである。」という記述があることにより、二つの「自分自身」が生きている者を指すことは明らかである。42については、画家と会社員の画とのかわりが例として挙げられていることで、この「自分」が想定された個であることが知られる。

c 思考・感覚の主体としての「自己・自分」

44 しかも嫉妬は、嫉妬される者の位置に自分を高めようとすることなく、むしろ彼を自分の位置に低めようとするのが普通である。(「嫉妬について」)

45 誰も他人の身代りに健康になることができぬ。また誰も自分の身代りに健康になることができぬ。健康は全く銘々のものである。(「健康について」)

46 自分が彼女に会ったのは運命であつた。自分がこの土地に來たのは運命であつた。自分が今の地位にあるのは運命であつた。個々の出来事が私にとつて運命であるのは、私の存在が全体として本来運命であるためである。(「希望について」)

これらの「自分」は、特定の、具体的な事象を受けて用いられたのではなく、仮に想定された人格を指すという点では、前項とほとんど変らない。ただ45の例文で「他人」と対照されて「自分」が用いられていること、46の例文での「自分」が「私」と置き換えられるような「自分」であることなどから、これらの「自分」が思考や判断の主体に立っていることが知られる。44の例文の場合でも、「自分」と「彼」とが対照されており、かつその「彼」が嫉妬される者を指していることからして、この「自分」が嫉妬する主体であると判断される。

d 思考・感覚の客体としての「自己・自分」

47 ひとは愛において自己を純粹な創造的活動のうちに没するとき、自己を独自の或る物として即ち自己の個性を見出す。(「個性について」)

48 生まれてくる者よりも死んでいった者に一層近く自分を感じるといふことは、年齢の影響に依るであらう。

(「死について」)

これらの例文に見られる「自己」や「自分」をここでは思考・感覚の客体として置かれたものとして分類した

い。例文47では、その思考の主体は普遍的な「ひと」であり、48の例文では筆者自身に近い存在であろうが、「自己」「自分」が客体化された存在としてそれぞれ「見出す」こと「感じる」ことの対象になっている点は共通すると思われる。

七 他・他人

「自己・自分」と対照されるのは「他・他人」ということになるはずだが、この人称詞は作品中に比較的少く、しかもそれは、いずれも思考や感覚の客体として登場する。本書が人間の本性を人間と人間との関わりにおいて捉えようとするものであれば、「他」や「他人」はもっと出現してよさそうであるが、それらの語で示されるはずの多くは「彼」「彼等」など他の人称詞で指示されているのであろう。

49 嫉妬は他を個性として認めること、自分を個性として理解することを知らない。一般的なものに関してひとは嫉妬するのである。(「嫉妬について」)

50 他人の期待に反して行為するといふことは考へられるよりも遙かに困難である。時には人々の期待に全く反して行動する勇氣をもたねばならぬ。(「利己主義について」)

51 ひとに阿ることは間違つたことを言ふよりも遙かに悪い。後者は他人を腐敗させはしないが、前者は他人を腐敗させ、その心をかどはかして真理の認識に対して無能力にするのである。(「偽善について」)

例文49では、「他」が「自分」と対比されて用いられている。同じく50では、冒頭の記述は「他人の期待に反して自分が行為する」の意であろうから、やはり「他人」は「自分」と対比されるものであろう。また、51の例文の「他人」は冒頭の「ひと」と同じく、「阿る」対象、「間違つたことを言ふ」対象として設定されていると思われる。これらが本書の中に用いられた「他・他人」の用法であり意味である。

八 ひと・人々

この作品の中には、自と他、私と彼のように対比する意味の人称語も多いが、その一方で、そのような対比を

越えた、あるいは自他未分化の人称詞として「ひと」「人々」「人間」なども多く用いられている。これらの語の指すところは、もとより基本的には人間一般なのであるが、用例を吟味してみると、必ずしもそう一元的にとらえられるもののみでもなく、相互に微妙な差異が認められる。その差に注目していくつかに分類してみたい。

a 人間一般を指す称としての「ひと」

52 ひととは未来について感傷することができぬ。少くとも感傷の対象であるやうな未来は眞の未来ではない。

〔感傷について〕

53 秩序は生命あらしめる原理である。そこにはつねに温かさがなければならぬ。ひとは温かさによつて生命の存在を感じする。〔秩序について〕

これらの例文は、人間の本性について述べたものであって、文中の「ひと」はいわば「人間」と置き換えることも可能な「ひと」である。故に人間一般の称として分類するのが妥当であろう。

b 社会生活者としての「ひと」

54 ひととは自己の不安から噂を作り、受取り、また伝へる。不安は情念の中の一つの情念でなく、むしろあらゆる情念を動かすもの、情念の情念ともいふべく、従つてまた情念を超えたものである。〔噂について〕

55 この場合（＝健康の場合）ひととはただ丈夫なとか弱いとかいふ甚だ一般的な判断で満足してゐるやうに思はれる。〔健康について〕

56 ひととは書きながら、もしくは書くことによつて思索することができる。しかし瞑想はさうではない。瞑想はいはば精神の休日である。〔瞑想について〕

これらの用例に見られる「ひと」は、社会生活の中で行動し、思索し、判断する主体としての色彩の濃いものである。これらが限定された具体的な存在としての「ひと」を指すものでないことは明らかで、いわば「私」にも「彼」にも置き換えることのできる、その意味で筆者によつて想定された個もしくはその集合体としての「ひと」であろうが、しかし、前項のように人間一般をさし、人間の本性、本質を説いたものとは一歩の差があると考えられる。

c 「私」「我々」と対比される存在としての「ひと」

行動、思索の主体としての「私」「我々」と対比される位置にあるもの、あるいはその外側にある存在として分類されるような「ひと」がこの項で取り上げようとするものである。他の人称詞で言えば、「他人・他」というのがこれに近い。

57 ひとに阿ることは間違つたことを言ふよりも遙かに悪い。後者は他人を腐敗させはしないが、前者は他人を腐敗させ、その心をかどはかして真理の認識に対して無能力にするのである。（偽善について）

58 ひとは私に個性が無限な存在であることを教へ、私もまたさう信じてゐる。（個性について）

59 他人の期待に反して行為するといふことは考へられるよりも遙かに困難である。時には人々の期待に全く反して行動する勇氣をもたねばならぬ。（利己主義について）

などというのがここのでいう「ひと・人々」の例である。57・59の「ひと」「人々」の指示するものは、それぞれ、これを含む文脈中の「他人」の指すものとはほ重なるであらうし、58の「ひと」はやはり文中の「私」と対比される存在と読みとることが出来る。ただ、このような「ひと」は、次項で挙げるものと内容面で重なりあう部分があり、明瞭にこの項に含まれると判断されるものはあまり多くはない。

d 「世間」の代名詞としての「ひと」

本書においては、筆者の見解を示すに当って、しばしばそれを世間の常識的な考えと対比する方法を取って説得力を強めようとしている。その場合、世間の（常識的な）人々、の意味で「ひと」「人々」の呼称が使われることも多い。

60 虚栄心においては相手は「世間」といふもの、詳しくいふと、甲でも乙でもないと同時に甲でも乙でもあるところの「ひと」、アノニムな「ひと」であるのに反して、名譽心においては相手は甲であり或ひは乙であり、それぞれの人間が個人としての独自性を失はないであるところの社会である。（名譽心について）

61 しかるに世の中にはそれに劣らぬ虚栄の出来事が多いことにひとは容易に気付かないのである。（死について）

62 心といふ実体性のないものについて如何にして技術は可能であるか、とひとはいふであらう。〔秩序について〕

63 ひとは愛と憎しみに心が分裂するといふ。しかしそれが感傷になると、愛も憎しきも一つに解け合ふ。〔感傷について〕

例文60の「ひと」が「世間」の同義語であるのは文脈上から明らかである。61-63の「ひと」もまた、世の中一般の人の意と考えられよう。

これらの用例における「ひと」は、bに挙げた「社会の生活者として」のそれと重なるようにも見える。事実、ある部分においては両者は重なる部分も多い。ただ、この項に分類したのは、主張する者、批判する者としての「ひと」であって、bの項のそれが行動する者としての「ひと」であったのといささか立場を異にするものである。

九 人間

この作品には、「人間」という呼称もかなり用いられている。この語がヒト、すなわち自然界の生物の一種としての人類の意味に用いられた場合は、これを人称詞と呼べるかどうか疑問であるが、「人間」という語の用法は、必ずしもそれだけに限定されないし、また、本書の中の用法も単一ではないと思われるので、前項の「ひと」同様、これも人称詞的な性格を持つものとして取り上げてみた。

a 生物的な存在としての「人間」

先に述べたヒトとしての意味を表す用法である。人間の諸側面のうち、もっとも生物的な面を強調した例といつてよい。

64 けれども芸術を模倣するのは固有な意味においては自然のうち人間のみである。人間が小説を模倣した模倣し得るのは人間が本性上小説的なものであるからでなければならぬ。〔虚栄について〕

65 もし私に人間の性の善であることを疑はせるものがあるとしたら、それは人間の心における嫉妬の存在であ

る。「嫉妬について」

66 旅の対象としてひとの好んで選ぶものが多くの場合自然であり、人間の生活にあつても原始的な、自然的な生活であるといふのも、これに関係すると考へることができるであらう。「旅について」

67 私はいま人間の死を立証しようとも、或ひはまた否定しようともするのではない。「死について」

このようなのが自然物としての「人間」の用例である。それがもっともよく現われているのは64・67の例であろうか。65の場合も、人間の本性について述べたものであるから、もっとも素朴な意味の「人間」と考えられる。

b 生活者としての「人間」

68 以前の人間は限定された世界のうちに生活してゐた。その住む地域は端から端まで見通しのできるものであつた。その用ゐる道具は何処の何某が作つたものであり、その技術はどれほどのものであるかが分かつてゐた。

——(中略)——

しかるに今日の人間の条件は異つてゐる。現代人は無限定な世界に住んでゐる。私は私の使つてゐる道具が何処の何某の作つたものであるかを知らないし、私が抛り所にしてゐる報道や知識も何処の何某から出たものであるかを知らない。「人間の条件について」

69 多少とも権力を有する地位にある者に最も必要な徳は、阿る者と純真な人間とをひとめで識別する力である。

（「偽善について」）

70 しかもかくの如き人生において人間は夢みることをやめないであらう。我々は我々の想像に従つて人生を生きてゐる。「旅について」

71 生理的親和性は心理的親和性に劣らず微妙で、大切である。多くの人間はそれに気付かない。しかし本能が彼等のために選択を行つてゐるのである。「健康について」

これらの用例に見られる「人間」が、生活者としての人間、に分類されるものである。68の場合は、「以前の人間」と「今日の人間」とを生活条件の違いで比較したものである。70の場合は、「我々の想像に従つて人生を生きてゐる」という記述から生活者としての「人間」の意味が浮かんでくる。71は、「本能が彼等のために」と

いふのを見ると、生物的な意味での人間とも考えられるが、「心理的親和性」が説かれていることは、生活者集團としての「人間」を想起させるであろう。

一〇 『哲学入門』その他の人称語

以上のように『人生論ノート』に見られる人称詞を分類し吟味してきたのであるが、それでは、これら『人生論ノート』に見られる人称詞の使用傾向が、その他の三木清の著作においても同じように見られるだろうか。それを確かめるために『哲学入門』（岩波新書）『語られざる哲学』（講談社学術文庫）の二つを選んで、それぞれの人称詞の使用状況を吟味してみた。

まず、『哲学入門』（一九四〇）からは△序章▽と△第二章「行為の問題」▽の二章について、その中の人称詞を『人生論ノート』のそれと比較してみる。

結論ふうに言えば、本書にも『人生論ノート』と同様に各種の人称詞が多様に使われている。両者の相違点は、『人生論ノート』に用例の少い「汝」が本書にはかなり頻繁に用いられていることであろう。その「汝」の用い方は、

72 カントはかような断言的命令として「汝の意志の格率が如何なる時にも同様に普遍的な立法の原理として妥当し得るように行為せよ」ということを掲げた。（第二章）

のように、対称詞として用いられたものもあるが、これは一例程度で、他の用例はすべて、

73 我は世界の中にいて他に対しているのであるが、我に對するものは何よりも汝である。我は汝に對して我であり、汝なしには我は考えられない。そして汝は單なる客観でなく主体である。（序論）

74 人間のまこととは何であろうか。我が汝から喚び起こされ、汝の呼び掛けに應えるということである。（第二章）

のように、設定された客体を指示して「我」や「自己」の主体指示語と対比される「汝」である。

『哲学入門』にこのような「汝」の用法が多く見られるのは、この書が人間の本質の探求ということをその主

題にしているためであらう。客体は同時に主体であり、客観は次の瞬間には主観となる。同様にして「我」は「汝」と別の存在ではない、というのが本書の終始説くところである。その主張を有効に展開するために「我」「汝」「他」のような個別的存在を示す人称詞を文中に設定する必要があったのであろう。

『人生論ノート』の基調はこれと違う。この書は、我々がその人生において体験し直面してゆく、さまざまな内面的、外面的事象にいかにか処すべきかを説くことに主眼があり、人間の本質を探索するというような姿勢は稀薄である。この書に「我」と「汝」とを対比するような記述が少く、従って「汝」という人称詞があまり用いられないのはそのためであらう。自称詞の中でも「私」や「我々」は各所に見られるが、「我」という語がほとんど見られないのもそのことを裏付ける。『人生論ノート』の中で唯一箇所、 \wedge 汝 \vee の使用が集中して現れるのは「幸福について」と題する章であるが、この章は、人間の理解を幸福追求の前提としているので、「私」と「汝」という個体を設定し、両者の関連のもとに考察を進める必要があったのであろう。

念のため、この「汝」という人称詞の用法を類書によって見ると、例えば中村雄二郎『哲学の現在』（一九七

七刊、岩波新書）には、

75 われは汝との関係においてはじめてわれとなるのであり、はじめからわれだけがあるということはない。

（Ⅲ自己とその基盤をなすもの」傍点原文）

76 われ―汝関係は、夫と妻、男と女、親と子、先輩と後輩、君と臣、教師と生徒等々、多くの対^{たい}をなす関係、

対抗的な二項関係のかたちをとることができる。（同右）

77 われ―汝関係は第三者の彼あるいはわれ―彼関係がつけ加わるとき、私たちの自他関係は動的なものになり、立体化される。（同右）

のような用例が見出される。これらの「汝」は、人間社会の役割関係において「われ」「彼」と対比されるもの、すなわち客体として設定された「汝」であって、この用法はほぼ『哲学入門』におけるそれに通じるものと思われる。

また、亀井勝一郎『愛の無常について』（角川文庫版、一九五二）を見ると、ここにも「汝」の用例がかなり

の数見出される。それには、

78 汝の隣人を愛せよと聖書は教へてゐます。(第二章愛の無常について) 傍線引用者)

79 弱きものよ、汝の名は女なりといふ言葉があります。(同右)

のように他からの引用によるものもあるが、

80 私は、民主主義といふ言葉を厳密に考へたとき、或る狼狽に似たものを感じざるをえませぬ。——中略——

汝個有の生きる道を、汝自ら工夫すべしといふことです。随分苦しいことになると思ふのです。(第一章精神について)

81 汝の妻、汝の兄弟を憎みつゝ、同胞の愛だけは説く人が少くない。(第二章愛の無常について)

82 青春の混沌たる途上に在つては、汝の敵などを受することは不可能です。——中略——汝の敵は、徹頭徹尾憎む以外にない。ただふしぎなことに、この憎しみにおいて、敵は忘れえぬ存在と化するのです。(同右)

などの用例に見られるものは、行動主体として文中に設定された「汝」であろう。言い換えれば、これらの「汝」は「おのれ」あるいは「彼」に置き換えても意味の伝達には支障のない人称詞であろうか。それは、「おのれ」「われ」などに対立する概念を示す「汝」ではなくて、一種の修辭的な「汝」の用法であるように思われる。それはこの『愛の無常について』が、一種の問答のスタイルをとり、それを基軸にして文章の説得力を高めようとしている姿勢の中から生み出された現象なのではあるまいか。

また、『語られざる哲学』(一九一九)からは、その後半、七章、十二章を選んでその中の人称詞を吟味してみた。本書の人称詞で目についたのは、「私」「私たち」などの自称詞とその文脈指示語としての「自己」の多用、また他称詞「彼ら」の多用である。

このうち、自称詞が多いのは、本書が「私の生長の心理的過程を告白録風に記し」(「我が青春」より)たものであり、筆者の「青春の感傷や懷疑や夢を綴っている」(同)ものである以上、いわば自然發生的な現象であろう。その用い方も、

83 私^レは連絡のある記述よりも、私^レのいまなしつつある仕事^が私^の生活を全く新しくしてくれることを望んでいる。(七)

84 私^と異なった立場が可能であるか、また私^と別な考え方があり得るか、私はそれを知らない。(九)

85 私^は楽しみを欲する、けれど弱小な楽しみよりも偉大なる苦しみを求める。しかしそれよりも以上に偉大なる楽しみを喜ぶ。あるいは私^は偉大なる苦しみを尊敬し、偉大なる楽しみを憧れる。(十二)

など、やや客体化された「私」の使用も見られるが、それらとて筆者自身を遠く隔たるものではなさそうである。

一方、複数の自称詞「私たち」「われわれ」の用法も、

86 悲しみや寂しさは私^{たち}の運命には必然的なものであって、私^{たち}はそれを単に自己の表面において感受するばかりでなく、自己の本来に還って行ったときにおいてすらそこに見出さずにはおられないようなものである。(九)

87 暗い闇の中にも私^{たち}は永劫の光あるものにぶつかってそれへの愛は私^{たち}をまた夢みさせずにはおかんだらう。(十一)

のように、筆者、読者をも含めて広く人間ないし現代人一般を指す人称詞としての用法、いわゆる inclusive we としてのそれが多い。時には、

88 当時流行していた文学者の名とそれらの人々の著作とが秩序もなく私^{たち}の話題に上った。世紀末の懐疑と頹廃とが私^{たち}を誘惑した。(七)

のように、筆者がわの人々^ののみを指して読者は含まない、いわゆる exclusive we と目される「私^{たち}」の用例も散見するが、その数は多くない。

さらに本書には「汝」という人称詞は他書の引用以外には見当らず、その点で『人生論ノート』と同様の傾向を示す。それは先に述べたように、本書が筆者自身の内面的経験の記述に主眼が置かれ、『哲学入門』のように、論理的な立場から人間の本質を説くような立場をとっていないためであろう。もし、そのような考察が試みられ

ていたならば、本書においても「私」が筆者自身をはなれた一個の人格として設定され、それに配される客体としての「汝」や「彼」も幾度か文中に出現したものと思われる。

その「彼」あるいは「彼ら」の用法であるが、まず「彼」は、

89 悪魔は怠け者より神に近いに相違ない。ただ悪魔が神になれないのは彼は悪を矜^{たか}つて、へりくだる貧しき心を欠いているからである。(八)

90 これに反して鈍い心の所有者はどんなに大きな経験に遭逢してもこれを浸透して輝く光をもっていないから、それは彼にとって何の価値もない黒い塊に過ぎない。(二〇)

など、文脈指示語として用いられた例が多く、その他の用法、例えば、「私」に対比される客体として設定された「彼」、のような用法は見られないようである。これに対して「彼ら」のほうは、前述のように頻出するが、その用法においても、

91 私はかつてニュートンの言葉から思い出して人生を砂浜にあって貝を拾うことに譬えた。——(中略)——ある者は歌いながらある者は泣きながら、ある者は戯れるようにある者は真面目に集めておる。彼らが群れつづけたらいておる砂浜の彼方に限りもなく拡って大きな音を響かせている暗い海には、彼らのある者は気づいておるようであり、ある者は全く無頓着であるらしい。(十)

のように、設定された複数の行動主体を指す指示語としての用法もあり、

92 利口な人、世故に長けた人とふつう称讃されておる人たちを見るに、彼らは自ら少しの反省をなすこともなしに、——(中略)——しかも彼らは彼らの生活が当前の生活だと無造作に考えて、もし彼ら以外の生活を生きようとする人があればふしぎに感じながら嘲笑する。(十一)

と、世間一般の人々を指す指示語としての用法、

93 あまりに懐疑的であり病的であるいわゆる近代人は偉大なるもの、健康なるものへの驚きを失い、従ってそれらへの愛と信仰とをなくしておる。彼らは偉大なるものよりも平凡なもの、健康なるものよりも病的なるもの、古典的なものよりも特性的なるもの、深きものよりも鋭きものにより多くの興味と関心とを見出す。

(十一)

など、ある限定された人々の集団を指す用法、

94 いかにもダ・ヴィンチやゲーテなどは生活の広い領域を征服し体験していたに相違ないが、彼らの驚くべき魂は彼らが関係した悉くの領分において一々普通人よりも深い理解をもつことができたのである。(十)

のように、特定の複数の個を指示する用法など、この人称詞の用法は変化に富む。中でも多いのは、世間一般の人々を指す用法で、それは「いわゆる世故に長けた人、世慣れた人」や「世の多くのいわゆる新しい人」などの言動に対する反撥が本書に多く見られることに関係すると思われる。

このような多彩な「彼ら」の使用は、本書の一つの特色と言うべき現象で、同じ筆者の著述でも『人生論ノート』や『哲学入門』には、このような「彼ら」の用法は認められない。そのことは恐らく両者の本質の違いを暗示するものであろう。すなわち、『人生論ノート』や『哲学入門』は、あるいは人間存在の意味を探索し、あるいは人生いかに生きるべきかを考察する。従って筆者の目はより多く人間の内に向けられている。それに対し、『語られざる哲学』は、一人の哲学青年の「若き日の内省の記録であるとともに、その半生の回顧録でもあ」(宮川透の「解説」から)って、その思索は多く、我と彼、自分と他人、己れと社会現実、という対比や相関を基盤として展開されている。そのために筆者の目はより多く外へ向けられている、と言えるのである。この視線の向け方の違いが、先に述べたような人称詞「彼ら」の使用状況の差を生みだす最大の原因となっているのである。

結 び

哲学関係の著述は一般に、「我」「我ら」「汝」「彼」「彼ら」のような人称詞の使用の多いことをその一特色とする。それは哲学という学問が人間と人間との関わりを考察しつつそこに人間の本質や本性を解明することを第一義とする以上、当然の現象ともいえよう。そして『人生論ノート』もまた、その例外ではない。

しかし、仔細に検討すると、『人生論ノート』の人称詞にはやはり他書とは違った、本書だけの特色や傾向が

認められるのである。例えば「汝」の使用例が本書に少いこととその理由については先に述べた。その他にも、自称詞の使用においては全般的には「私」が用いられ、「我」は「汝」と対比される形で、特定の章に集中して現れることなども一つの特色として挙げることができよう。同じような現象は『哲学入門』の序章にも見られる。ただし、後述するように「私」「我々」の使用頻度は両者の間にはっきりした差が認められる。

日本語の自称詞にもいくつかあるが、その中で「私」は筆者自身の自称として用いられることが多く、「我」は設定された行動主体として用いられることが多い。また「自分」などは文脈指示語として使われるのが第一義であろう。もっとも中には、

「環境は私に對してあるものとして普通に客観と見なされている。けれど翻って考えてみると、環境は私に對してあるというよりも私が環境の中にあるのである。」（『哲学入門』八序論）

のように、行動主体として設定される「私」もある。その自称詞の使用に関して見ると、『哲学入門』には「人間」「自己」が多く行動主体として文中に設定されているのに対し、『人生論ノート』ではそれが「私」「我々」であることが多い。そのことは、前者が、一つの事象を対象化し客体化して述べようとするのに、後者には同じく事象を筆者や読者に直接関わる現象として主体的に捉えようとする姿勢が大であることを反映しているものと思われる。

論述系の文章を読んでいると、いろいろな形で筆者が文面に介入する現象が認められるが、それを形式面から分類すると、次の四種になるであろう。

A、「私は……と考える」「私は先に……と述べた」などの形で筆者個人が直接介入するもの。

B、「我々は……せざるをえない」「私たちは……を考慮する必要がある」など、読者をも含めた複数の形で文面に介入するもの。

C、「この本を……と名づけるのは、……の意図にもとづくものである」のように、筆者を示す自称詞が省かれた形で間接的に介入が示されるもの。

D、「……のことが……を推測させる」「これらの現象は……と考えられる」など、事象を主体とした述べ方の中

に筆者の介入が示されるもの。

これを、直接の介入(A・B)と間接の介入(C・D)とに分けてもよいであろう。そして両者の表現効果を比較すれば、CD型が事象を客体化して分析的に述べるといふ印象を読者に与えるのに対し、AB型が事象をより主體的、総合的に——つまり筆者や読者に直接関わるものとして表現するといふ印象を読者に与えるという違いがある。

そう考えると、前述のように、各種の人称詞が多様な意味をもって使用され、中でも「私」「我々」のような自称詞が全面的に多用されていることは、この『人生論ノート』が現代のわれわれの直面するさまざまな問題を、読者と共に考え探求してゆこうとする筆者の姿勢を映し出すものと言つてよいように思う。また、そのような筆者の姿勢がこれらの人称詞の使用を通じて読者にも伝わりとするなら、本書が刊行以来多くの読者を獲得してこの筆者の著作を代表する名著となったことに、人称詞の使用も何がしかの貢献をしていると言えるのではないだろうか。

私はこれまで、主に小説作品の人称詞の使用について調べてきた。哲学関係の著作を対象にしてこのような考察を試みたのは今回が初めてである。しかも私は哲学という学問については全く門外漢である。従つて、こういう形で哲学者の文章を論じるのは、あるいは無謀というそしりを免れないかもしれない。しかし、『人生論ノート』は啓蒙色の濃いものであるし、その読者層も広い範囲に亘ることを考えると、時にはこういう素人の試みも許されてよいのではあるまいか。

もとより、この著作は啓蒙書、教養書という性格の強いものであるから、この小論で述べたことが、哲学の著述全般に当てはまるなどとは全く考えていない。ただ、小説の文章を分析的に考えるとき、人称詞の使用状況を見るのが作者の描写の姿勢や視点のあり方を探る上に一つの手がかりにもなることを考えると、小説以外の各種の文章についてこのような観点から考察を加えてみるのも、それらの表現の特徴や効果を捉えるのにながち無駄な操作とも言えまいと思うのである。